續後撰和歌集

下

特別
へ4
8099
10(2)

N4
8099
10
(2)

續後撰和歌集巻第十一

戀哥一

頼不知　　元人しらず

なにはづのみなかみとのみ思ひつるあふ事をだにかたらねばかな

いとせ河ながしてしるもしらぬ人をこふるは

人麿

ぎりつよくたびらの蓑はかりをかりこゝろ迷はてゝ

伊勢

源とたのみ侍りし人のもとへ

元人しらず

尊經閣文庫

〈2001-025〉

夏の野の草下かくれゆく水のをとをしらでやおもふよはのねさめを

寛平の時后宮歌合哥

人しれぬ思ひはつねに涙川せきいでてあまる袖のしづくと

女よみ人しらず

権中納言定頼

奥山にいはまの瀧つせはやくてとゞめむやなどをきてやむ

堀河院の時艶書の哥を人々によみて女房におくりける

小つゝしてもらすをとめし時よみ侍りける

大納言忠教

人しれず恋はまさるやなみだ川せきとめかねて袖ぞぬれける

禎子内親王家摂津

恋しさはたゞ見しよりもまさりけりこゝろにかゝる瀧なるらん

おなじく艶書に

権中納言国信

あさましやこゝろづくしに袖ぬれてたえずおもひにこがるなるかな

恋哥中に

左京大夫顕輔

いかにせん江の葦の下根のみおもひしげりてとふ人のなき

俊恵法師

わが恋は人しらぬまのかきくもりやまずみえこそあらめして

鎌倉右大臣

わが恋はさらぬ山井のすみ衣人しれずのみぬれてぞしぼる

式子内親王

[illegible]

正三位 知家

寄草戀といへるを

雅成親王

あきぎりの[illegible]

百首うた[illegible]

殷富門院大輔

なみのうへの[illegible]

おなじ心を

鎌倉右大臣

かなしきものとてとこよりは我れとそ思ひしられぬ

女房[illegible]

[illegible]

源重之

葦[illegible]

思戀[illegible]

海京極摂政前太政大臣

[illegible]

家六百番歌合

[illegible]

建保二年内大臣家百首歌

戀

前中納言宣家

九条大丈顕浦家百首合

清輔朝臣

[illegible]

前大納言基良

九月十三夜十首百首合

奪司院帥

[illegible]

百首歌奉りける時

後鳥羽院御製

[illegible]

権大納言宗家

[illegible]

洞院摂政家百首歌

従三位行能

住吉の浦の[illegible]

宋縁法師

[illegible]

土御門院小宰相

おりふしもちらしもみちの常盤木の松乃みとりもみえ行は

入道前攝政左大臣

道ありてわか君よ始来思ひにわかれとこゝろ人もみな

皇太后宮大夫俊成女

いくせんとせの山あゐもとてわかいのちとも露のかゝるさを

式子内親王

忘れしといひし名はよそにきゝてこそよその旅乃末まてもみよ

九月十三夜十首哥合に寄旅戀

前太政大臣

煙たにみえぬ思ひをやまにふかくすゑにしもかりしを

左近大将實雅

なひくとも見えぬ煙の下にのみあはれとはんとはしら雲

弁内侍

あらましのくちてもえしと蔵よくん吉乃旅もとゝにたえ

百首哥奉りし時寄煙戀

源俊平

いつまてか名をもしのひ末下もえの思ひの煙乃ても末えかは

忍戀を

参議為氏

もろ袖にしのひし物を一夜たにくやとはいかてしかるへかりける

寄雲恋　皇太后宮大夫俊成女

したはしき夕の雲はそれとなくいはて思ふとさにこそあらん

人々に十首歌めされしついでに　太上天皇

しらせつゝあはれなりつきぬきそらにもよはぬ思ひは深からん

十首歌合に忍久恋　土御門院小宰相

人しれぬこゝろに年月の命ともなれる思ひよそにつれなき

少将内侍

たえてさき袖はかれにしほとそておもひくらしに涙をそゆる

恋歌中に　素暹法師

袖のうへにつゝむなみだのひとしほにしのびて人めをつゝむ涙かな

蓮生法師

はてはまた恋しのびあへぬこそ思ふ事のあらはれてつゝみかね

寄草恋　祝部成茂

しら露やなにとあらそふ草のはにむすふ思ひのしたきえもせす

藤原頼朝臣

岩かねの水のみなもと下草やしられぬ恋のたえてくるらん

基俊

櫻あさぢの下草しとゝのこのさまに袖の露はきえもやらなん

法性寺入道前関白家百首の内恋歌

皇太后宮大夫俊成

人しれぬ神をも祈るいのちかな恋しきなかの思ひ出にせん

刑部卿頼輔家歌合に恋の心を

前参議教長

源河人ちかひをたがへて恋よはいかなる神の罰をかうむる

恋の中に

式子内親王

恋の君に神をつかへしかひもなし思ひ知るとは百度の内にぞ

太上天皇

なをこふるきて石野の滝をうやうやしく神にたむけ源河の

ゆくすえは暁やみにまよひぬるかな思ひ知るとは百度の内にぞ

七降の石宮乃もりをふつてきり

平宣文

そもそもきのうまれし神のみそなはしてつねに思ひ知るとは

女房

なをこふるてらの

業平朝臣

源河ちかひをたがへてこの世の人恋しきこころ神のしるらん

恋の中に

式子内親王

いかなるせんこひしきあまりちかひをたがへ源河命のゆく

城川院艶書合に

大納言忠教

[illegible]

京極前関白家肥後

[illegible]

[illegible]

家

續後撰和歌集巻第十二

戀歌二

影不知　柿本人麿

かくてのみ恋やわたらんたまきはる命をしらぬ人の子ゆえ

貫之

ぬきみだれ思ひしをりにこそ玉ぬきの緒とはしられけれ

毎のあうがこえまちつくもきりとりかねて年

和泉式部

[illegible]

[illegible]

仲平

ありとてもたのむへき物かはと世の中に何かはとまる露の命そ

権中納言定頼

はかなさをわか身のうへによそふれは白露はきゆるもまたぬ命なりけり

右大臣に侍りける時家に百首歌よみ侍りけるに述懐

後法性寺入道前関白太政大臣

しのふへき人もなき身はあるをりにあはれあはれといひやおかまし

俊恵法師歌合に　　道因法師

恋しなはうき世をいとふなにはかりいまはてたえにしものを　孫

郁芳門院歌合に　　修理大夫顕季

かりそめとおもひしやとの露の命をたのむ涙なりけり

題しらす　　正三位知家

さのみやはおもひすてけむむかしにかへる命の程をつくしきるらん

侍従伊成

けふまても憂き命のつれなさやはかなきなかにのこる

源孝行

毎のはるにおもひしかれ命をしらぬ世の中にいきてこそみれ

寂延法師

ありてもたのまぬ身をやしらぬ命をしる物なれや

平重時朝臣

逢事の人たのめのとはかり涙をさてもあらましき

久戀

左衛門院小宰相

年をへてくるしき物と思ひしらでなほ恋路にまよはまし

源家長朝臣

かぎりなきなげきにたへぬ命をば思ひ知るべき人ぞ知る

戀奇中に

皇太后宮大夫俊成

恨ては思ひ絶えぬる夜夢にもあはぬ人をうらみつるかな

十首の内てまつり侍りし時恋のうちを

大納言隆親

はかなくもうつつの夢にまどろまぬ人をうらみぬ

不遇戀の心をよめる

西園寺入道前太政大臣

もとゝなる人をうらみぬ身の恨をこゝに形をかへまし

皇太后宮大夫俊成

思ひ初し夢ぢの道のあきぬるをとゝまりてもなほ

いかなりし人をうらみぬ

中院侍従

あはれなる物思ひつゝ夜ぬまもうらん神とこゝまで

名所百首の内

順徳院御製

とゝまりぬ伏見の里の枕夢もいくよの人のうらゝ

戀十首の内合よ寄遠戀

笹竹の年久しき墨のとろめるもとの筆の跡

慈円中将

ありき世の跡とあはれ物を思ふ夜の月をみるかな

注三位俊成

建保四年百首歌

前中納言定家

夜もすがら月はうき世にて秋をそなく命はもとて物思ふとて

影をうつす

武子内親王

うきものとやうもれぬしるくさはく神の淀よ

百首歌あてまうす時寄淀恋

入道前摂政太政大臣

前太政大臣

淀川神のみをつくしのこさるはと

慈円中将

恋ひ侘ぬ物思ひいりとをるへ共見てよそ恋浦なる海人

侍二位頼氏

影しるす

忘れぬる浦とはいつしよ恋ふる袖をたとりに宮ゐられ

人の心のうちなれとうちつけにかきい人はあるなりけり

伊勢武海のとろく淀のうれをみしかなとてをみしかなとて

中納言家成卿寄合

藤原通憲

[illegible]ぬ神乃浦 うの

鎌倉右大臣

[illegible]浪のうらにきてうたゝんと

家よりの[illegible]

慈円

法性寺入道前関白太政大臣

[illegible]神のせゝ

都芳門院女藝

[illegible]神とて[illegible]

式部内親王

[illegible]浪つたゝまし

源家長朝臣

[illegible]人

藤原親盛

[illegible]神

源重之

[illegible]葉

藤原道經

[illegible]神

鎌倉右大臣

[illegible]

道助法親王家五十首歌よみ侍りける

前中納言定家

いくかもなくてかすみそめしかな大空の春の色は浦風ぞ

従二位家隆

名にしおはばいざこと問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと

百首歌たてまつりしときの内大臣

春たちていくかもへぬ袖の色の浦なみよりもまさるなりけり

右近大将公相

松浦潟袖のうらかぜ吹きそめてなほ春ならぬ波よりけりなる

権大納言實雄

大宰権帥為經

権中納言公師卿

かすみ立ちそめしかたの春の色は浦なみよりもまさるなりけり

入道前摂政家憲十首歌たてまつりし時

藻壁門院少将

春の来ぬ袖のうらかぜ吹きそめてなほ春ならぬ波よりけりなる

建保二年内大臣家百首歌奉りし時

藻中納言定家

春たちていくかもへぬ袖の色の浦なみよりもまさるなりけり

新古今

権大納言長家

風をまちうつる人にうらもとをしらぬ海のみちくる方をしらず

前内大臣 家

なかれてのうらを舟ゆきつりする海人のこころもとをしらぬ

いくよもん波の神よ海人なれてつる舟うかぶ色

正三位成實

なにはひとをもとつくしてやあれかえるよ立てのうらもん

宮舟歌

同院右近大臣

みなれそめしそこのあしまよりしらぬ舟をこぎてこそ

右京大夫

名取河あまくだりする中小憲

大御門院御製

あとてあふ波のすえやはるかなる山中の澤川を

京極前内大臣家歌合

恵方中

行末をたれ波の河のうつ流れ八重よりつもる新年のき

慈木田延成

せきこむる波の川のうき枕うきて淀のうらそけめ米

藤原永光

きえぬとてみてさへ閑して成そてくる波をみてる神のきつ見

源家清

とくせをも物ふる神の中よりなつ波の川はきをしりてうを

洞院摂政家百首ニ不遇恋

法三位行能

いたづらに人をしのぶの浦なみの名のみたつとは思ひそめしを

恋の心

権中納言長方

信濃路をきてはみさらぬ山ぢにもいくしほ神のかゆる袖かな

待賢門院堀川

なほしのぶ心ぞ人にしられぬる思ひ入るまの月の光に

東三條入道前摂政関白

女郎花ぬれてやとまる露の玉ふかくとうるる秋の夕べに

後京極摂政前太政大臣

千五百番歌合に

雲

前中納言定家

ふるさとの人の心の花ぞ昔の香にのこるなりける

忠峯

ながめやる方もなしとて思ひ入る葛木山の嶺の雲

正治百首ニ為家卿

人ぞ見ぬ秋の夜ながの月ばかりくまなき空の雲の

忠峯

ながめつる月の光のうつりにし人の心の花の中をとて

京極前関白太政大臣

年をへぬ思ひなりけり月のみぞ人の心の花の

百首ニ為家卿

鷹司院按察

いうまでもなく此物語の年代は[illegible]

物語りたるにもたるや如何[illegible]

少将内侍

前大納言基良

我とうらめしこうまでなかりけるものを物思ふ[illegible]

前参議忠定

[illegible]

恋ゆえて

前大僧正慈鎮

[illegible]

不遇恋のこと

前内大臣 基

[illegible]

恋ゆえて

宮松恋

左衛門督通成

[illegible]

家五十首より宮松恋

入道二品親王道助

[illegible]

恋ゆえ中ゝ

前大納言為家

[illegible]

入道前右政家三合小雪馬癒

源家清

葉分乃山乃峯乃尾乃ゆくとてはかなくとてきし

石河郎女

歌もろ次

見ゆまとて思ひ乃道乃ゆくふかきもの

よ人人もろ次

世間乃うきもつらきもしなしなくものまさ

ものとも成るうき身をいかてはるかに思ひとも

はなるゆくもつらきか

恵威

癒之

ものとのもろ人乃つらき成ゆ

癒之中よ

ものとなくて成ゆくもあてはつつ

源なりゆ

續後撰和歌集巻第十三

戀歌三

延喜御製

人の母まゝ女ゝ侍　御息所

をとゝしの河のほとりにて侍りしに

蔵人頭にはべりし時小蔵命婦に

九條右大臣

秋の夜の月をたのもしるべにて

[illegible]

[illegible]

[illegible]

和泉式部

[illegible]

[illegible]

[illegible]

三條院女蔵人左近

[illegible]

戀歌中ゝ

前參議教長

[illegible]

百首の歌の内

殷富門院大輔

[illegible]

題しらす　皇太后宮大夫俊成女

ちかりし尾上のまつしもは契けめやつて別もしらぬいのちよ

小侍従

まちもみよおなし我世のむかし今にて我もしらるはよし我

法印慈延(?)　平長時

そのむかしを又ありしにかはりても物思ひすまぬ身となりなにゝ

題しらす　参議為氏

いにしへの人の心にあはれしれはあはれなる中の葉のかなしみ

後鳥羽院御製

わか恋はたゝかきしら山の雲間よりほのかにも月の影をまつかな

正治百首歌めしけるついてに

さのみまてそのよし人はまてとても浮世の月の行方まて

恋の歌の中に　二条院讃岐

忘まつとはしてやとらぬまれのこよひにて明けぬるはいさよひの月

百首歌奉りしとき寄月恋　入道二品親王道助

その影てもむかしきこえぬはいにしへのまにけし月を待まつ

題しらす　中納言家持

今更にまつ人こしやあきらめてあかつきの月わかれてけはなる

藤原光俊朝臣

[illegible]

藤原仲實朝臣

今こむとたのめしことのはのうつりゆくまに月をまちつる

中納言資季

ひかりさしそふるまつのこずえにかかる月

大伴高女

吹風のはやきにたえぬ散のこる枯のしたはの

山口女王

ひかりさしそふるまつのこずえにかかる月

[illegible]

持ちかへるこしのすゑ人者ちかへるあかぬ

来無實憑しるるうらを

法三位頼政

かつ来とたのまぬものをすつるかなかくあるべきものとしりながら

城河院より百首のうちに月初會恋

基俊

乃ちまぢかくなりぬるかなとうれしく

久安百首の中に

皇太后宮大夫俊成

[illegible]

[illegible]

前大納言隆房

[illegible]

興風

[illegible]

神祇伯顕仲

[illegible]

業平朝臣

[illegible]

[illegible]

無名抄元良親王家哥合ニ曉別戀

[illegible]

[illegible]

入道前摂政家哥合ニ寄鳥戀

[illegible]

西園寺入道前太政大臣

[illegible]

更衣源清子

[illegible]

延喜御製

[illegible]

[illegible]

左近大將朝光

[illegible]

女のもとよりかへりて朝につかはしける

道信朝臣

露よりもそれかへりつるあさまたきなにゝたとへん

雲つゝみあした女のもとよりかへりてつかはしける

右近大将朝光

あけはてゝ曇りなき山の白雪は道をまどはしてぞかれぬる

よみ人しらず

こえすまじ浪こえぬべきすゑの松山にちぎりし雪はたえにけり 〔錦〕

題しらず

業平朝臣

はかなくて心をかへしまつのまほらまでたえしとぞ思

清慎公よりつかはしける　中務

ありみても後あふ人もなしかはかくてあさくのみぬべきさまを

女にはじめてつかはしける

清原深養父

恨てもしかるかひなきさゝ浪のよるよるいかで心えん

ところもおちて恋わびぬる人に別かちける

業平朝臣

いとひても誰の別のかたからむありしにまさるけふはかなしも

いのちのけふの時よりの人にさきだちて世をさりし

亭子院御製

雲井よりさかなきをすみぞめの里にてさはりとぞ思はぬ

あくまでもいとりと思ふ人よりけりと言ふ

和泉式部

なにごとは変るも、さらば命さへ毎こころ変りなるべし

人とうらみてはいつよ物いとしごちしてのちつつ分

清少納言

我なりつつこころもとすてみやしらこちしこそ乱れ

影不知

平忠盛朝臣

紀姫乃開ちえてして中くよゆつをとりの袖のあまえれ

藤原伊尹

なにかせんよ毎こはすもろん恵の事ならんとて人の開

藤原時朝

寄閑恋

なにかはの文金坂と毎てこれからうろ閑えりはぬし

百首の毎てまつ〳〵いらさ

藤原雲門院但馬

あるまじよりてしてこれき桐坂のとれあるこ源の毎まとは

恋の中小

西行法師

唐衣たちつるれるつまとかはかれて物へ毎はれはせ

えりてくきるもえうろ人毎つるて分

前中納言定家

いろふもんあるつ別とうきりりてあるせあるつ世とかるつハ

もの人まうりなんとこうんまてなんいらはれ来
ら申をこせて伯宮なんまいる事よ

和泉式部

行むら殿人去命をあり毛をよまつる毛をあるあるあ
人よりきこせなる

宣孝天皇内裏

あとこそて宣孝来時いつ連ノこと西新よりてあれはれ
寝ゐ院りそそまうなる

監命婦

はるれて人をやあるとむ内はれ草こたれあるなる
かこりよりあつつ参ら〜給人1

章子院内裏

かそそこそのまをあるあるの新よりを我あるは
清順公少将より給なるられたりつ〜きる

武部卿敦慶親王家大和

人一見こそ中ふか行る夫八焼たてくゆられとれ
ぬて

清順公

市乃新の市ぬ焼しあるものをあるつる来ぬなる
あひてこそなる女よけるこそ

業平朝臣

はるる波ハあるをすそそこそ武の新ってこにあるまるる

はるかなる世のひとを見てたのしむ

権中納言敦忠

はるもこだちの心よりとをんて今まで世をもいとうかのは

百首うたのうち寄風戀

大宰權帥為經

數ならぬ身は山をはやみくよりひとりあるよりあれさはるかな

寄雲戀

藤原行家朝臣

いこまの山嶺より初雪の白雲のうへにてうの中ハとはるはるけく

遠島羽院下野

はるかなる日ゝをかさねてあしたゆくあとのはるかん

右近大將正相

とりのくもゐのひとくさしゝやうのあるなかのあとをたのまん

藤原為継朝臣

わすれぬいうちの世をよもうひとそうきふつをそうへを思ふ

影不知

かゝりをいつのみん世の雲まあるへいみをつ

小辨

秋の夜の月

續後撰和歌集巻第十八

戀歌四

寛平御時后の宮歌合に

[illegible]人[illegible]

[illegible]て今はかきりとなりぬと更よしての歌[illegible]

[illegible]

辭別母

[illegible]

後法性寺入道前関白家百首に逢不遇恋

後京極摂政前太政大臣

わとりのよこけうつりて別るるものなりけりをんな

戀の中に

前大納言資賢

かきりのくうるる中をとりあへずなりぬるをとこ

順德院御製

一とせのあうなりしをあてもなきものとなれかなるやすれなるものとなる

尚侍家中納言

[illegible]

前内大臣

逢ものと後にとなりたるのちにまたあうものなりけるを

十首の合に遇不會戀

大宰權帥為經

為行[illegible]人伯耆守

経三位兼之

中宮亮兼

別憲

[illegible]有長朝臣

家[illegible]百首[illegible]人伯耆守時遇不逢恋

洞院右大臣

[illegible]

前内大臣 家

[illegible]

[illegible]院時[illegible]

[illegible]

大納言隆親

[illegible]

入道前右大臣家憲十首[illegible]合[illegible]遇恋

藻璧門院但馬

[illegible]

[illegible]

前中納言定房

[illegible]

大炊御門右大臣

新不知

[illegible]

中原師尚

[illegible]

藤原信實朝臣

[illegible]

皇太后宮大夫俊成女

[illegible]

鷹司院按察

前大納言為家

[illegible]

藤原為継朝臣

[illegible]

真昭法師

[illegible]

前中納言定家

[illegible]

百首歌をよませ給ける　　前左近大臣

夏よりこのかた中をもあらそひかねてのきぬる

[illegible]　　中納言資季

[illegible]

夢のうちのあやかりとなん白露の[illegible]

建保二年内大臣家百首歌に名所恋　　大納言入道前関白

わたりもあへぬまもよりつき橋のかりのしばしのかりそめ

白雲のたえまにかくれゆく[illegible]の橋を名にしおへる神の御[illegible]

[illegible]　　前中納言定家

人[illegible]橋のはなのかげにたちかくれ

[illegible]　　恋見

わたりかねてよせてしかりつる[illegible]

人をあまのをぶねかな　　橋侯爵朝臣

波ハなれ[illegible]　　文学士内藤

[illegible]　　中務

まひつるも二の世八へかんわたり河のわたりせをまよはしこそまし

寂蓮法師

契こし昔の花とよしの川わたりせをえにこりてたえぬ枝

兵部卿成賢

なか絶て松の思ひを川うりしせしにのこるむすひし秋

崇徳院御時百首歌たてまつりける時

基俊

あさましや猶もはなせぬむすひの緒のこゝろひとつくるしきそこ

入道前摂政家恋十首歌合に寄網恋

藻壁門院但馬

たく網のうちはへくるしさ人にこそみえて浦にしくるとをみ

あのしして物申すらぬ女そしきぬ海よなみぬへしこそつて

かつりしきろ

皇太后宮大夫俊成

人しれぬ恋に浪にたえかねつゝいつかなる浦のかたるとるみん

恋歌中に

京極前関白家肥後

葦火たく火のやるせなくかなしきもにしむすひもこころさ

かなしくそとせさりきろ人にいかつしろ

法成寺入道前摂政家歌合

あふ事はあきさななるきやみちこそかゝりゆてこそて

馬内侍

[illegible]

影ら源　赤人

春たて草木乃うへもとくもゆきえつゝ我八盛やけぬ

前内大臣　家

思ふ称らぬ人乃ゝ[illegible]

齋院よて物申ゝ乃人間ゝ[illegible]

てゝ乃ひよかきゝ[illegible]

前大納言公任

年乃[illegible]

影しらす

式部門院小廣

ゝ乃[illegible]

西行法師

乃神を田乃[illegible]

夏草よりぬ物ゝ人ゝ[illegible]

人乃[illegible]

[illegible]

京極前関白家肥後

[illegible]

[illegible]

左近大将朝臣

毎年のごとくなれども忘れぬこころざしの花

夏戀　源家長朝臣

ふるさとの人のなきかげ忘れぬ蟬しぐれとぞ聞

建保二年内大臣家百首のよし名所戀

葉末なるやまとなでしこ思ひ寄る恋もしらぬ露の

前中納言定家

七月七日女御流れ女王ふかしのもとにて

七夕の夜人のもとにまかりて車ふかしのもとにて

天暦御製

織女とかはらうやむしろ秋ごとに衣ぬぎ敷く

小弁

影とぞ

和泉式部

ながらへてみるかぎりなれば秋ごとに風とふきぬる

前参議大臣

秋風にあまのかはなみたちぬれば

太政門院御製

袖よりぬ菅原ふかぬ秋の夜

式子内親王

秋の来ぬ行くもとまらぬ月ぞ

きぬぎぬのうらこそはかなけれ

入道前摂政家憲十首会に寄衣恋

中納言資季

月草の花とり分てこの衣
道助法親王家五十首会に寄露恋

正三位知家

あさつゆ
恋二中1

前中納言定家

屋とりもてるあの萩の露
袖のなかにいて

従二位家隆

かへしこ思ひもとりもてる年の暮れ

九條右大臣

物萩の下葉のもとをみる時
宣耀殿女御内裏にまゐらせ給ふ

天暦御製

白露の
恋の心を

奴忠

とりもてる風にはよそに成さはる
秋の夜の月

参議雅経

大方の萩とはそれと物こと
従二位家隆

紅葉のさかりの頃の夜の月を見て人々こゝろ染て

昌泰三年八月十六夜奇合小憲

をしなべて人しれぬ秋をなげくらんたれかとゝまる

影しなす　伊勢

をみなへしなほ色みえぬてらす月の波のうへ

秋の野のかゝるこゝろ顧の秋よそゝ鳴ぬるを

物ゝ月のあるゝ人ゝに

一人ゝ次

權中納言宣頼

ゆくゝ人ゝ

前中納言定家

ゆくゝ人ゝ

前大納言基良

ゆくゝ人ゝ

相模

ゆくゝ人ゝ

元輔

ゆくゝ人ゝ

續後撰和歌集巻第十五

戀五

影供の

三輪山をしるしの杉にかけてのみ我を人とは我ぞ知れる

そなたの方にかすみのこめる夕ぐれは人の恨もなぐさ

いくかさねとはいとはるる人のなさけよ

和泉式部

見たりしたれかはつくばの浦なれし海士

今更の申名人よ　赤染衛門

海人とてふるまもいかなん苔衣ぬれてのわとなれ

戀三中よ　權大納言長家

わとりの音あまたの夜をかさねてもあかぬ

女よりて後　源信明朝臣

うき恨とてもあかぬ松山をこえてのちにぞ

中務

松山をこえかねぬ恨ぞ人物うは

戀三中よ　皇太后宮大夫俊成

浪のたちかへりぬとしてをしいくたりゆくすゑの松

ちとせ申名人ゆ　祐子内親王家紀伊

ちとせ浪とをこえをしたる年ぬ松山をこえ

かくしいろはなることのうんせいとはあらず
うたなども事ゆきるとひとくさハうきにつらい分
和泉式部

たのもしんぬもみえぬさるの方ゆ行ゆ誰ゆいしら
家慈十首哥合ニ寄舟戀
入道前摂政太政大臣

慈円年代紀ゆく松浦舟いくよにしらぬ浪ちてて
ふるはしらきゆこころゆこそ舟ゆて行ゆ
藤原光俊朝臣
慈哥中ニ

ゆふ夫ゆ行ゆ人の物ゆ
被忘戀ゆ
前大僧正慈鎮

思ひきるひとゆけまゆ
歌不知
順徳院御製

ゆ人ゆ
鎌倉右大臣

わとゆ身ハうゆ
源具親

今ハゆ
宋緑法師

毎の夜ごとに夢をつくさせ給ふ涙とてまうこと申さんれば

久安百首の中に　待賢門院堀河

つれなくて人のかよひをみるねにも新の北てうるまれぬ

人めつつみる

相模

いかにして恋すてふ名のたちにけん人もとひくるまもまれなる

前右衛門督

新不知

伊勢の海人の雲のうへ鳴金のようにたなびく人の心を

赤染衛門

契ることのかなはざりしの人はなれ世をうく命のあるかぎりは

和泉式部

毎ひとつくうみ書物に今とてまうあるかぎりの

百首のうたをまうけ時寄鏡戀

前太政大臣

たのもしてあるかぎりまうす鏡うつりはてぬ心をも

入道前右衛門督家百首の合よりおなじ心を

後河院氏部の曲

うつせとて見せぬ鏡の新よりこゆるもうつるかな

新不知

行念法師

山鳥のおろのかがみてのちなれ別のうけを思ひて

絶戀のうた

太御門院小宰相

秋のうちにてすぎ世よあるべき物と
いたりとおもうて人を祭らんかと思ひ世にて死
九月十三夜十首の会よ寄月恨恋
太上天皇
あぬ人のうらみてまちゆるものかうらみぬ
月よしの神のもりのあらきかの色新たくうらみ
権大納言公基
千五百番歌合よ
後鳥羽院御製
長月の月のひかりもまちもてものの
地とたのめの
前内大臣 基
恋歌中よ
祭りたのうの称とて、昔よりあり時月あり源とあるの
内大臣
恋すてとこひて色今、暁明の月にて人を形見のうれ
百首の色てまちし時寄月恋
右近大将公相
まちあかしこひもつれの月にれの地とたのと
おのもちを
右近中将忠基
あるひとつとあの月新とあるまつのかうの人鈴
藤原信實朝臣

山ちかふかすみわたりてこそ侍しの月をあはれ
九月十三夜十首会よ寄月恨恋
権中納言雅通
思ひうきねやのくさむしとかこちしは月
遇不会恋
修明門院大貳
ぬれぬ袖物思ふ月の影見ては
今こむとたのめしことのはかなさに
藤原永光
うらこのもとのひとり物を暁の
後京為教朝臣
入道前右大臣家歌合よ寄鳥恋
正三位知家
なかなかに恨ぬよりはうたがはし
暁恋
賀茂種平
ねぬ夢にて絶ぬ思ひ
わとりの草ねの秋をとはるるかな
業平朝臣
忘草うゑしかきねの物思ひ
影不知
わとりの草ねの今ハうゑしかきねの
よ人人しる

伊勢の海にあそふあまとも長閑見えすまゐにしかし忘れきさきさき

藤原成宗

今はみをことそて年ゆくの忘られもうきはたゝへの身をそらもかな

寂縁法師

いまはたゝよはひとゝもにゆく人をとこそ思ひしにいつはりのみそぬらさる

惟宗成長

恨よりいはぬによかさなる唐衣夢にも人にいはれけるかな

被忌戀

藤原盛方朝臣

今はさくらかれしその世を思ひてやわかれしへて恋しかりまし

恋三首中に

興風

いさらむて浪ふかく思ひしかともやるかたのなき山岩井の水

弾正尹元平親王むすめしくかくいはせて後きこえ

て侍りけるにあひ侍らさりけれはよみてつかはしける

みをうらみる事に　藤原後蔭女

世のうきもみえしたゝるの山水の誰とのへらぬをとゝむらん

ある物申侍りけるおとこにはかなうて次のとしよし

ひつかはしたりける　高陽院木綿四手

わすれ迄てありける道の草葉しけることや摘まかせつるたね

題しらす　人麿

華別の山田のひたくりかへしつゝ以上今人をたにほしきかを

小町

たちかへりあはれとやうたたねの夢の通ひぢ

千載百番歌合より　前大納言忠良

秋さらば何をかはまくのあしたの原のをしなべて

百首歌たてまつりしとき　殿富門院大夫

ちはやぶる神のいがきにしるしをかけてよしの川

百首歌たてまつりしとき　前大納言基良

ながれてはかはらぬ水のうたかたの

絶戀のうたを　お大僧正慈鎮

ながらへばまたこのごろのうきにかはる

久安百首歌中　皇太后宮大夫俊成

今とのみ思ひ入道前関白家の恨戀といへる

法性寺入道前関白家の恨戀　左京大夫顕輔

ながらへばまたこのごろのうきにかはる

戀歌中より　寂蓮法師

なにとてかうきものとのみ思ひ

八重院高倉

恨恋のこころを

西園寺入道前太政大臣

かぜはやみとまらぬ涙ながれ出てうき名のみをしるしなりけり

従二位家隆

わたつみの波の間ぬらすこの頃の袖にくるしき浪のなかに

藤原基俊

浪よせぬ磯の松風ばかりにてあはれとはいはぬ人をこそ思へ

躬恒

あはれとはいはぬ人をこそ思へ

三條院女蔵人左近

ぬれぬるかとはいはぬ人をこそ思へ

續後撰和歌集巻第十六

雜哥上

家の百首のうちに伊勢の時

後京極摂政前太政大臣

風のとゝのはぬまさ木の久方のあまのかぐ山いとゞへぬん

城の院百首のうちに雲の時山を

權大納言公實

神さびてつかへつゝ山のたなびく雲ぬきまそのあさ

ぼらけ志賀の入江にさゝ波の緑のあれ山のかくる

基俊

奥山の岩根ふみ分け雲ぬきのあとこそなけれ

東北院の渡殿の屏風に水を入てゝ伊勢

藤式部

新みくもうきの波たちかさなりて水鶏のたゝく

前參議より伊勢の時布引瀧入よりて侍伊勢

前中納言定家

たゝこゆるきよ瀧もなをそのありてうれよ神やおろし

名西のうつ〻のつゝそよ

後鳥羽院御製

布引の瀧乃もとにてうたれける侍ける

注二位頼氏

為兼河雲乃みなもゆくへ乃まもるかな

布引瀧を読侍ける

大炊御門右大臣

影不知

河とよ花を乃なかれ乃ゆくへ乃ゆくへ乃ゆくへ乃

墓俊

吉野川乃やまかけ乃ゆくへ乃ゆくへ乃ゆくへ乃

人くに乃百首歌乃内

順徳院御製

為すの河七瀬乃ふちに吹風乃

影しら乃

泊瀬川乃ふる乃ゆくへ乃ゆくへ乃ゆくへ乃

八幡御神楽乃まつりくに乃

膳命法師

つくも乃ふる乃ゆくへ乃ゆくへ乃ゆくへ乃

影不知

為人

為人乃ふる乃ゆくへ乃ゆくへ乃ゆくへ乃

為人しらす

見乃ゆくへ乃ゆくへ乃ゆくへ乃

権中納言国信

たえてひくなれは小船や入ぬらんなにはのうらの浦さひしろ

名所百首歌よみ侍し中に

前大納言為家

みなとえのまつ湊は白州の浪まてに梶の音よそに有を

洞院摂政家百首歌よミ侍けるに

覚仁法親王

あはれなるいなさはこほりやむすふらん汐のよるへに鴻独なき

百首歌奉りし時湊千鳥

前太政大臣

わかの浦やしほひのかたにすむ千鳥むかしの跡をみるもかなし

名所をよみて

くもゐの橋の柱まきてむかしをとほく思ひ渡るか

寄橋述懐といふこゝろを

兵部卿有教

わたりの我やたつみんかはのくゐはかへる橋は跡もなき世に

花をみけるとてよみ侍ける

従三位行能

都ともみえし川の柳まつこそあれ春のにしき

前参議忠定

背かてかへるも小鹿ゐの身ハいにしへの浦かな

延喜十四年女四宮歌合

貫之

あくるとしの春はとてとうすとて我身ぞいたくふるとなる

同廿一年京極御息所春日社にまうでたりける日大和

国のはてのかすかなるところにてよめる

躬恒

年ごとにもみつるかすがの野の若草もいかなる春にあへるなるらん

枇杷左大臣よなりて大臣よりなりたりける

さうらう

貫信乙

たれてふうぐひすもあるべし梅花をりしらずとやいはんとすらん

枇杷左大臣

ひとゝせ内の御前に春のあるべきよしをもとめさせ給ひ

貫之左兵衛佐にて梅花をみてよめる

春の中の道をしたどりてゆきさるべきかな

よみ人しらず

春宮中将

梅花もとめてゆきしかをりをたにとまりてしるらん

敦忠

清涼殿にうすくれなゐの梅花をいけたるを

心ざしあるにこたへてにほひをぞ花のあるじとはしる

きさいの宮

右源御門

[illegible]

藤原清輔朝臣

行[illegible]

源兼明

七十の春をけふまでよかりけるは
大峯にて花を見てしかばかな

静仁法親王

世をそむくゝ野に春のつゝ[illegible]花をすてゝ花を[illegible]
花の中より

雅成親王

[illegible]

建保四年百首歌たてまつりける時

入道前摂政太政大臣

[illegible]

藤原教定朝臣

[illegible]

為雅卿白石清水時奈使よりかうし舞人にて
[illegible]

賢方朝臣

桂河かはの花ゆへにかはのつゝみ

陪従として年ひさしくなりぬる人のもと

藤原親継

うたてのみとのみ思ひすてられぬるかなしさ

暮春の心を詠ず

賀茂重平

花見ていとゝ春をしたふまに今ゝくれぬる花のいろ

四三位 知家

海よりのはるかぜにたのまれぬ春のなごりの

右衛門督基氏

いつまでかはかなき身はかりそめのうやらしのこれるさ

中月日のまもなくすぎぬれば

櫻花さかりのみえ宣旨のいとゝ人のもと

法印隆弁

市の御ぶさきの花のかげにしまして御ぶすまの山さくら

上東門院より花櫻の色をそへてつかはす

権大納言長家

さくらかりしるしの神のおきてにて花をもとめて

上東門院

四位

櫻のさかりのいとゝ今もしるしの新しみてまし

夏哥中り

従二位 家隆

花見ぬるまもしるしの小神のうれすす

藤原孝継
拂てもむすふたまれる露の草枕ぬるよはかゆく夜はの秋風そふく

正三位知家
君かへてうゑし池の汀の草ひく人のなき詠そつき
なけく年経るかな　をす

堀川院中宮上総
契りおれやとゝもに待れる月よりもなかめつもなき玉まつを

題しらす
平長時
水さひの江の入江の汐の入ぬまに舟人
いそくらめたいその枯葉郎云舟の舟人とたゝし汐そなく

寛平御時后の宮の歌合哥
よみ人しらす
ちりのたえぬ世やたのまれぬ夏の夜は蛍の鳴てかはるらん

七夕の歌
平泰時朝臣
あまのかはさゝ河霧にたちこめて秋とての天の星逢
文

中原師員
天の川とわたる風に織女のあまつ雲のかよひち

秋歌中に
寂蓮法師
君をとははゝ草葉にかけてとふ人なく露と

槿を
参議定経
山の端の朝の袖にきえあさかほの花の露より光のこしはかなし

歌不知

秋はなほ山のふもとにすまいして月をぞ見しの夕暮の空

家平首尾ふる人伯父の時曉鹿

鹿とく深山の秋の月をぞ見てなくなる

秋の中より

僧正行意

かりこもの秋とはいたく白露のすゑの露にも秋風ぞふく

大納言通方

夢ぢをぞ秋とはいはぬ白露の玉しく秋の田のかりほの

浅二位家隆

袖ぬれぬ別をなげくなれば秋の暮月

津守国經

八月十五夜の月を見てよめる

月をのみ秋とはいはぬ人の世に秋の月をぞ見てまし

平政村朝臣

秋のこころをよめる

秋の月のこころの山の月

藤原泰經

ひとりのみ秋の月をぞ見ん

前泰親法定

月前虫

いく秋の雲井のうへにすむ月を鹿

後法性寺入道関白家百首小月

皇太后宮大夫俊成

世中とそひきて九月とて秋の月なのみそ秋なる
九月十三夜十首奇合よ光乃海そてそていと
はるて長月といふこと成

藤原信實朝臣

つゆ玉そ散る山里のこゝろ人なれと月のこゝろ人世よ空ふ
なりてく年てみやとよりのりて伯き九月
十三夜くまなりきろに前物申ろ人のをとゝふ
とゝ

平泰時朝臣

なこゝろく今をかとゝ月新よもしれ秋をうてをを
秋奇中ろ

藤原基綱

身よりはの物をうとへてのもとにひとりの来ぬ月

経家法師

片糸のもろく出れとゝこゝ涙の露ぬきあへぬ
西ますす九伯きろこゝ出ときて

前大僧正慈鎮

第百九首ろのこゝ
影不知

中務

つゝとも秋ろけとゝ蓋ろ

光西法師

あてやこ人とも月秋ろ

九月十三夜十首の会よみ給ふ紅葉

祝部成茂

七十の老ぬとの行くゝ山ゝてたゞ紅葉をぞ
秋の暮よりこゝ侍りし

後堀河院民部卿典侍

かゝらんとてのこる涙のいくしぐれ
身を秋の山の紅葉は涙にぞ
なりくるゝ侍りし秋のこゝろに

前大納言基良

後徳大寺左大臣の

皇太后宮大夫俊成

むらゝとも秋のこゝろを行くらんとこそ
秋のこゝろをこそ

家隆

なの月のこゝろを行くとこそ
影しゝ涙

法師

思事とこゝろにかゝるこゝ涙
物思ひなりとふこゝろをみるこゝ
なる事侍りしこゝ
世中よりこゝ侍りしかくもこゝ
萩を

左京大夫顕輔

意未田成長女

小野宮右大臣

後鳥羽院御製

贈太政大臣

きくの花をのこすなく秋の花色々秋ぞ地と

影不知　前内府白川大臣

なふとても思ひ捨て秋の月ぞ

西三位知家

春ちかき谷の梅の香ゆ秋宵の神ぞ思ひ出ん

ゆくかりてよりくゆいさかられては輪寺にまう

てくらん

如願法師

しらくもの山よりそこれてあの葉のそこなる波の

色こそ秋をくるすすゆ秋の月のこゝろ暁

前内大臣　藤原清範

うちそそぐ雨ぞ秋の夜の月ぞ

影しる波　後鳥羽院御製

夜もすがら秋の山とは思へども

貞應元年豊明節会月ぞまちいでつる事

なりて前中納言定家卿につかはす

西園寺入道前太政大臣

月ぞ雲かくれもとめぬ山ぞ

前中納言定家卿ニ時参詣

ひとり秋なほとゝめぬすゝ世ぞ

前のおほきおとゝいまうちの人参詣の時豊明の

和小忌さて伯もろと及ぶこれのりてきの
ま見てえん神のつかさ社そ
ま人もろ次
ぬ
わきてみつの乃色そのまれとそれもとぬこよ社之人
此時祭社頭ちうあもりさいつ之ちよ社之の舞人
ま宅社市ちうあもりを
前大政大臣
ちうとの衣乃宅社きえそよ
藤原永光
大峯ま
前大僧正行尊

へしうあ宅ま山ちうあもりを山ちうあもりとそうの社之人ま
年社ま
前摂政光平
ぬまに
法ま
法不覚寛
年社ひとう春いとそ
源親房
いとうよ社ま年月ま
信阿法師
六中ま
年乃社ま基俊ま

法性寺入道前関白太政大臣

なりてのち　もとの身になりていくらもあらぬ

わかなかりける

續後撰和歌集卷第十七

雜哥中

影不知　　藤原人もとの沢

山ちかくさす月をいとなつかしとおもひよりけり

源俊頼朝臣

ありとのみ聞こえしにはてしかさしく月をなにとみるらん

月あらぬ海よりいでて人くにの山ぶかき寺にかくれぬる

祝部成仲

あるもなきものとなりぬる我よりはいとかうきしるしなれ

月哥中に

慈円　延成

[illegible]

寒蓮法師

なほ[illegible]

藤原信實朝臣

月[illegible]

[illegible]

後鳥羽院

[illegible]

藻壁門院少將

[illegible]

寶治元年[illegible]

[illegible]

小直廬より俤てよ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

藤原隆祐朝臣

[illegible]

建保三年内裏[illegible]合より野曉月

藤原康光

[illegible]

[illegible]

[illegible]

賀茂重保

[illegible]

晨明の月にそそりて山のそばめくを見入るかなるの
　藤原義孝
古寺月といふこころを　正三位知家
昔見し高野の山の暁をしのぶす先の月を
高野山はこころをたれの
　源具親朝臣
今宵ぞ海の底の月をみて市の松原を思遣
後徳大寺左大臣西行法師をとうのして大原の
まうでしに来迎院の客僧人述懐とて
　藤原定家朝臣
　縁起上人

山のふもとの新宮にまうでて月の明
　　俊成卿
　　後京極摂政前太政大臣
やどす寺の暁の鐘をたづねてまうでしに
家五十首のうちの暁述懐
　　入道二品親王道助
歎かるる暁ごとの鐘の音に夢やさめぬ
　　古四門院御製
おもひすてし人の面影をとどめ
廬山雨夜草菴中とかきて年ふりぬる人を
思ひいでにまうでて後に見ればもの

[illegible]　　貞慶上人

建仁元年　　源光行

むとせにてあいこの[illegible]くもの[illegible]をひらけすみかの山の[illegible]

山里にすまで[illegible]

八條院高倉

[illegible]

百首のうちもてさつし時山郭水

入道二品親王道助

かをうつしとゝめるかたをみるにはいとゝ[illegible]

世[illegible]のうちまで後山里にまうでゝ[illegible]

[illegible]

藤原定家朝臣

[illegible]

素暹法師

[illegible]

前大僧正慈鎮無動寺にすみ侍りけるころ

西行法師

[illegible]

前大僧正慈鎮

うきを見てれば山のけぶりも
年ふる西山よりすゑ人伯の
事伯て蓮生法師うたをこつらへきる

入道親王道覚

山川よりそれまでは池のうへ
なり

蓮生法師

法の水よりすゑはいかきしけ
家よ伯きるかつらはまとと亭子院よりてあるさつる
そよろ

躬恒

ふとの家と月の桂をたえてこの
まくいかつてうえよつて
まて

恵性法師とをりて四条風呂のあ
して空のこれの前よりあるきあまいるつい
て四つ一つ見たりすゑて

延喜十年製

あるけてゆくこまい磯の浦なみの
と為ることなん

長治二年三月中殿
をつ通伯をる小四郎
をうををを

神代よりのまことをせんはいかゝまことの歌人の雙紙とうせんとうけくふかきつゝみ

中將

我らいにしへのあとをたのみてあるかたもなし

世をのがれて後に請のこゝろをたゝせんと

貞慶上人

ものをこそ思へとなれ道とおもへり行かたもなき橋をたゝせ

影供歌

あるかたはなすなくこゝろなるかたもなくこゝろなるかたもなく

前大僧正慈鎮

かゝるもしらでのゝ人をたゝせよ老の波をたゝせみつゝ

老の後人よりそくるゝ

中よ

皇太后宮大夫俊成女

ゆきゝ人なをたゝせよとのゝ人のこゝろ

兼文の法師ものゝ古今集を借てかきてさしてせんとくよ

前中納言定家

あるかたもなきせゝの堀木枯をたゝせてみるかたもなし

影供歌

正三位知家

つゝみの浦のゝもとをくつをかきをたゝせよとわれをたゝせ

前中納言定家新勅撰集をたゝせ行ゝ歌をたゝ

[illegible]

浄意法師

[illegible]

藤原為經朝臣

[illegible]

為家卿歌議の時八代集作者位下傳[illegible]

と申侍しを送つかはすとてかきて侍

[illegible]草かきあつめてもらひたるを[illegible]浦

蓮生法師のもとへ[illegible]

[illegible]

平泰時朝臣

[illegible]

[illegible]

[illegible]

神代のとしまを我忘れてさとりあはれ世の末の祈れしき
　　中原所光

捨非遠使よ伯耆の時過ぬ政よまいりて国をこひ
て宇に異けきば　　中原友景

海くいろなる方よかりあたと三ぬとてうたきりの波
道明は親王家五十首歌閑中燈
　　法印覚寛

二条のおとゝ新うるとの友もあり　　きてて忘れ
暁のこを　　前右政尤大臣

ひと雲のうの月やとれてきとふのるとあけぬと島の月
　　左四門院内侍

ちうの月明はねうさかれもあ我思とれとれとも
述懐のこを　　前大納言忠良

世のうとを今いるけ一こ思て勇をとうつかきう祝れ
　　正三位成實

一すのよ祈ひたとうのこよりのふ紅ものけのけうまて
　　基俊

ち祈てうきれたうて祈よやうて祈くをとうとあれ
　　俊頼朝臣

いかとれちあれと濱のうつ玉をふうつのまて一いよ寿ん

[illegible]

赤人

白浪の立ちくるごとしらぬ我身をおくかぶさぬ里

[illegible]

[illegible]

[illegible]

述懐の歌小

雅成親王

世中に浦瀬をわたると吉野川
はやきあさくかなしかりけり

侍従具定

世中小松うきものとなりにけり年を経
る山の雪ふるまつ

前大僧正隆明

ながらこそ我身ひとつをとどめて
身をとうきものとしてあるかな

基俊

年をへてあけくれ家をよそにのみ
見つるかな

松と成

前

正三位知家

いかるらこそとおもいしね松はるかに
世中はかりのちねの松

藤原光俊朝臣

こゝにきてかりとなるとも
今を世をすゝめらるゝ人よ

前参議信成

うらもなくいとうひとを頼
みてうらもなくいとうひとを頼
みて人しらぬ

源有長朝臣

うらもなくとうとう紅葉の命
ながらへてやはかなしん
雄野よりまつて行道よかきつを
伯父の中小

[illegible]

八條院高倉

[illegible]

雅成親王

[illegible]

前内大臣　家

[illegible]

右近中將經家

[illegible]

法眼長惠

[illegible]

藤原信實朝臣

[illegible]

中原師季

世中をうれはしとおもひ給ふ

法眼尊海

[illegible]

式部卿門院内侍

[illegible]

皇太后宮大夫俊成女

うき身をいつかはかくしすてゝ山のあなたにこもるべき
今をかぎりのあはれさは思ひすてゝ二世の事をとゝも
なかるべきものにしたがひて行くべき身の年をつもれば

仁和寺二品親王守覺

前中納言定家

川水よりはいかゝうき名のながれもとゞまらぬ世をいとふ身を
恨なりとかなしきことなりけりとて

前参議藤原朝臣

うき世をいとはぬ人なきよなれども命ながらへぬるうらめしさ

前太政大臣

かくてのみあるべきことにあらねば命ながらへぬるうらめしさ

述懷の中に

前大僧正慈鎮

ながらへばまたこのごろの恥もあらばなほ忍ぶべきをぬるゝ袖かな

西園寺入道前太政大臣

明日香河淵瀬もわかぬこゝろにてあるべきものとおもふ人もなれ

前内大臣

なべて世はかなしきものとおもふ身のとゝまるべきかは

建保二年内裏歌合に

秋十首の内

僧正行意

今をかぎりの命にあらねども草葉にすがる露の命はかなし

四年百首うたてまつりけるとき

入道前右兵衛大佐

世の中絶えて人の恋ひたるやとの草葉にもまがふしかな

前大僧正慈鎮

我ゆゑに人の恋ひけるものとのみ思ひ知らるる

前大僧正慈鎮道世乃ゆ神ゆ小雨世つつ

後鳥羽院の御製

恋ひそめし人の心ぞ知らるる

門路にて思ひ見ぬ人の恋ひ侘びぬ

前大僧正慈鎮

物思へと月やは知る我ぞ知る

恋ひそめしよりの人の心ぞ知らるる

後鳥羽院の御製

知らず不知

人も行く人も来ぬ山の道ぞ世世過ぐしける

物思へ

續後撰和歌集巻第十八

雜哥下

百首哥よみ侍りける時懷舊の心を

太御門院内侍

秋の月をながめつくしてこよひ又ものをもふ人の
影をこそ思へ

權中納言國信

てる月の雲井の影はそれなれど世をこそ思へ
むかしをぞ思ふ

順德院御製

ふるさとの春の花ゆゑ思ひ出ぬ人の心ぞ
雨の袖老人思ふ心を

大納言隆親

春日社にて百首哥よみ侍りける時懷舊

權僧正圓經

磯の神みてしぬさにかけてこそ我身をかへる道
をたのもしき時鐘の聲ふかきつゆ分

堀明親王

思ひたつ數見るもみよましらぬ人かたりもすこ
兵部卿元良親王かくれて後伊勢の申つかは
して

女御綴子女王

かくれてもこの世にはなをとどめけるかな

少将高光こゝにかくれたりとよみ侍りけるを

て出侍りけるつゝみの中

なきこゝろ人侍りけり

大納言師氏女

あさゝはのをのゝ山ゝ人しれぬ草の露とぞ消

ぬる

前権僧正隆覚

影不知

来えぬとて命ハ草の露なれとく方なきこゝろ

思ふ事侍りけるころ

堀川院中宮上総

いたくこゝろ悪をなむく道なん我こゝろ人のあ

ゝ

お家をんなとゝいて立侍りけるを見侍りけ

まうひとゝ乃やうにてまゐ

お家の濱よりう

信生法師

ぬ〳〵うきよをかゝ横雲乃そ

蓮阿法師

なむ

ゝ世のなかのよそ侍

順徳院御製

影しる

来てとひよかしとゝいりひそ

雅成親王

夢をとゝ侍

雅成親王

ゝ花てうたゝかる世ハみぬそゝ

藤原光成朝臣

仕事似夢とゝ事を

ゝ

ゝにうたゝかの夢とゝ

ゝ

夢を　平政村朝臣

[illegible]　秋部忠成

はつかさい[illegible]　[illegible]

前参議云時[illegible]

納云實国[illegible]

[illegible]　大納言實家

[illegible]　權大納云實国

[illegible]

影不知　皇太后宮大夫俊成女

乃[illegible]　八條院高倉

[illegible]　權大僧都實伊

[illegible]

西行法師[illegible]

白浪の[illegible]　家蓮法師

影不知　敬忠

波のうへにて西の浦のうつを見しるべきこゝにさまやうの見
たゝ涙のうきまくらはなしく草枕のうへ袖のかゝるさ

丸人たゝ涙

そのゝて雲と成ぬる物のふかすまむ方をあくれもまよ
見ぬ世事ゆゑのうきをうきを小月見けるこのてを自
月ゆへ思ひつゝ〜うつしてゆかれ

小町

世中にあるうん涙よりなりいてゝ有明の月をかこちいみよ
世のうきれをと思くうきゆゑ

藤原顕綱朝臣

伊勢

ぬるあの紀よ紙をく時の涙にて神のうへなの閑居なりかれ

和泉式部

たゝよいとたてそうゝむらもなきあるゝ人恋奈ハ

赤染衛門

おく濡ゝ袖ゝ袖ゝ小ゝ雲ゝ雲ゝ焼ゝ人ゝ絶ゝ

藤原信實朝臣

あれのもとにまてゝあるて花ゆゑ方のみくゝ恋ん乱れのゝ

無常哀ゝ

前大僧正慈鎮

いゝ多ゝ蓮の露と見とのてきえあの海の春ゝ乱れ

入道親王道覚

年こ春草生といふ題を

前大僧正慈鎮

うゐかぬ若草ふかぬ若草のすゑ葉のかくれ草のたひらを

影しる波

古四門院法橋

春ゆく花秋の紅葉のあきはてゝ

あるをしらるゝみきのうすゝみそめぬと

贈僧正玄修為まうして後二条内大臣諫師授けをくるとき

ちりぬるなさ海よ波のうらかぜ

宣修法師

ちりこゝろ波ちりてあきの三ひし沼よかたらひ宮沼

人のあき沼よ月ゆかさよ申つゝ

法橋顕昭

ちりし世ゆかたらぬ夢とのの月をみくさふ昔をもいろん

影不知

道命法師

ちりしゆく世をうゝ夢といひつゝ夢見よ花を見むと

猪隅入道開白為四天王寺

ちりゝゝを見てよ後の春かゝ沼よ花

櫻花ちりぬるあとの雨の墨ぬぎ着のこる人ぞ哀なる

世中をうきものとのみ思ひしに

世中はまことの夢なりけりとうつつ覚めてみる夢なれば

雅宗行経

紅回法師

うたがはしかりしかとも夢さめてのちはまことの世をうつつとぞ思ふ

中原行範

相空法師

なにはがたあしまをわけてこぎ出ぬ

西行法師

なにはがたあしまをわけてこぎ出ぬ

宗盛法師

こしかの庭よ霧ふりぬ

西行法師

なにはがたあしまをわけてこぎ出ぬ

名部の敦国親を為西行法師ゆかりの秋九月つごもりの

ゆかりのうちにうつろひぬ

ゆかりのうちにうつろひぬ

小弁

ゆかりのうちにうつろひぬ

清順法師母為ゆかりのうちにうつろひぬ

月を入て

負信公

かれぬ月はやてのくいてゝ新き人はゆかりのうちにうつろひぬ

女御藤原述子かくれ給ひてのち月を見給ひて

て

天晴沙製

[illegible]

後三條院の四位よりして中納言資綱卿

つゝて宣旨

権僧正静円

[illegible]

又乃思ふ[illegible]

[illegible]

中納言兼俊

藤衣[illegible]

素性法師[illegible]

躬恒

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

桜宴使朝光

[illegible]

延長八年諒闇[illegible]

[illegible]

中納言兼俊

[illegible]

[illegible]

前参議信成

藻璧門院四十九日あれなるくて民部卿典侍

西三位家衡

後堀川院民部卿典侍

入道太政大臣為忠西園寺に

前大政大臣

朱雀院の御母三条殿

忠見

女御高子かくれ給へる安祥寺にて海のやうに侍る

業平朝臣

[illegible]

源重之

思いてかつてき物八人〜迄ぬ〻乃うらはれ日乃ゝ
藻礒門院四事乃後年乃後年乃ゝ伯乃ゝと人先
うゝひて伯乃ゝ乃ゝ乃ゝ事よ

後城門院民部卿典侍

かゝつてきいう三毒乃ゝこゝろそもひけとも之てゝ迄ゝさしぬゝ伯乃ゝ
後城河院の四ゝ乃ゝ日よりゝ

年盤茂

乃ゝ春乃ゝ別よりゝ乃ゝ月日ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

吹風よ誰をかまねく荒屋の庭の草の上の露

父の墓所にまゐりて

兵部少輔有教

ふるさとの春を忘れぬ若草の名残の松の色

母の墓所にまゐりて高野の山にて詠

法眼俊性

空をとぶ雁の行方ひとつ雲の名残をいとかなしき

父成仲卿まゐりて後徳大寺左大臣にまゐりて

後部少輔成仲

九十あまりの年に別るる年よりの涙ぞ袖にしぐるる

影ちらす次

藤原基經

ちらすとも山のあらしの雲をはらひ月日の光見せなむ

父秀衡卿まゐりて平泉にて

藤原秀衡

藤衣ぬぎすてし方をなほ恋ひて袖なほ濡るる人のなさけに

花原基政

ちりぬるは波の上にもいとかなしの宮の春の名残

前中納言宣家卿

殿面門院大納

いかなるぬさハうき物とこひくて京のかきを

今やとろ集

續後撰和歌集巻第十九

羇旅歌

藤原助信朝臣

さすらへて

天暦御製

唐衣なれもなつかしひとの神ひとの神たちあつまりてみよ

わたしまへ海人

中納言兼輔

ありしかの八しまもこゝにあつまりてあるかひあるしるしなりけり

旅よりのち人のもとへつかはしける

藤原高光

角しをゆく草の枕の露ふかく分入る源の中納言

源左忠朝臣近江守にてなりてくだりしかの

貫之

つれなくて恋にまさるものなしとなげかしわびぬ人の身をかな

業服上人入唐のときつかはしける

性空上人

夢の中につれなき人の袖ふれてなみだにぬるる袖のうらかな

参議輔親

つれなくて夢にはあはぬ袖のうへにあはれ涙のかかるなりけり

丹後

恋人しら波

みな

ぬれぬれぬ袖にかかるなみだのつぶてにみなそこにしづむ

小町

寄物の命をかけて物をおもふ人のこころのうちにこそ

宣秋門院丹後

別れぬるあとにぞ思ふ袖の露ぬれてはかなきものとなりぬる

雅成親王

たのもしく道ゆく人の命をかけてこそ思ふ人のこころは

正三位知家

ぬれぬれぬ袖にかかるなみだのつぶてにみなそこにしづむ

藤原教定朝臣

[illegible]

[illegible]

前大僧正行尊

命ありてみもあひたん母のたちもとにたちよりもとめたる
老の涙いもうこれ法文報恩のよすがにとふらふ丸
てけうらーきろ

権僧正永縁

[illegible]

成尋法師入唐の時母のよめる
栄えつる露の命はかなくて海のむこうにあはでひぬる
なんーこれは母のもとへおつるーきぬ

四屋のうちの中のあるーきぬ
あるうちにまりをうちかけていとあはれなる
あるうちにまりをうちかけていとあはれなる

前中納言匡房

別れのそでにうかぶ涙川かさねてや海のかたへとゆく
もとへまりをうちかけてとうれい

京極前関白家肥後

秋ーもなほ三月のあるうち唐衣うむとはなれてよつぎの
やうにのうちをよみまりをうちかけ人

大納言忠家母

[illegible]

遠行前大僧正　西行法師

[illegible]

下野国の住人[illegible]　前中納言定家

[illegible]

[illegible]　蓮生法師

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]　法眼耀清

年月[illegible]

久安百首の撰[illegible]　皇太后宮大夫俊成

[illegible]

[illegible]　入道二品親王道助

雲[illegible]

撰[illegible]　入道前摂政太政大臣

[illegible]　前左近大将實有

きりぎりすは夢をかよはす草の野辺をかれてきいくよ秋の月

雅成親王

秋の草乃枯しの白露とこの月をはなれ一夜ばかりの宿

十首の会に秋宿月

右近大将公相

ちぢに吹風のはつ尾の草枯に秋の夏はむしのふるまい

秋宿松風

前中納言定家

夏衣すそのよりそしの秋なれやもしの松風よりの墨人や夏むしの

秋宿夏月

權中納言顕朝

夏衣すそのよりそしの草枯むしのふるこの月そしのこの

秋宿

真昭法師

いく重よりの雲のはたてのしのかりきぬの秋の暁ちかそ

きりぎりすなきてのこの道よりてのこの伯もの

藤原孝標女

秋くれのき秋のそこに色とまれぬ山てのこの月

罌粟中秋

藤原永光

秋霧のさむ秋のこの山せよ衣きうすれ秋の秋人

秋時雨

法下覚寛

あし衣とのるとつけよむ時雨のこの山とりせそ

雅の月は秋のつまの人まのとのふ島乃中山

四て時雨ふるは　蓮生法師

甲斐ゝ嶺ハとも雲とゝ分て　行方もくらす　中山

ゆく道とてよりの　源兼明

ふるさとをたゝ　ゝ　事ハさのゝ　ゝ　ゝ　ゝ

雅縁法師

桂木ごもり　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

こゝ　ゝ　ゝ　ゝ　鎌倉右大臣

こゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　後京極摂政前太政大臣

建暦二年内裏詩歌合　法印四鞠中晩望

注二位　家隆

若所百首　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

僧正行意

前内大臣　家

西行法師

首ノ野中乃志ゝ原かゝ[illegible]初ハ乃新をゝ[illegible]いつゝん
影不知　　ゆ人しらす
草枕たゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
人麿
つきもこの神をとゝめてまゝ浦ゝこすをゝしすゝて家乃
大納言旅人
くさゝえ乃入江に毋あさり行ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
長田王
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゆ人しらす

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
海路乃うたを
前中納言通房
かきりあるハ屋乃ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
あしの心を
宋蓮法師
里のあさ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
我子内親王
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
待賢門院堀河
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
登蓮法師

人さこのゝ儀の松ゝ孫枝まて色そめしこゝ[illegible]

道明寺親王家の五十首のうち海猿

前大政大臣

あま衣たゝなく鴉よりそこゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

いてけるて西院御拜の儀のあらはしてまつる

ものいつく事ハ　前太政大臣

色々の事務よいふの年うけてう西のゆさいにおけるつの

鳥羽殿よりもめてたくもせはく池邊ハとりてこと

謙ものゝ時序をてまつりて

いとひさくもあとをハとりえれはもすあう池水

かけうをハとりも千代のあるみえてふすもそもとも池の

色をハ常盤ハとりけるくも千代ゆやちうにはあうけハ

大納言典侍

百首ハ所あてまつりし時顔松

元代ハよりよみてさせ筆ハうさゝやはしの松はいと

亭子院ハよりおもしくハ時ハまとこそ四月

そのハの日ハつこてして石宮ハ四方よりそま

はゝせはそかきいをとさせはゝ

延喜四年

二業ハうをまつとひうもひうきゝをうこてもよ

五日ハうを　太上天皇

いとをうこハうの原よりハの日ハて千代のたなしよハ世ひ進ん

吹田ハて千首ハうをれしつめてゆ祝

来て乃重八代を面白しとたつね給ふ鶴毛衣

建永元年八月十五夜鳥羽殿に所幸ありて四位

ゆくゑ四位をとゝのへ給ふ月の夜和歌所の

こゝろをさゝせ給ふ

後鳥羽院御製

いにしへをしのぶの草に月の影とまりしあの秋の池水

今上位よりの世ゆゑ大政大臣よりこゝに参し

ける日牛車をりて西園寺の花を見て

前大政大臣

ゆゑ有る都のよすゑの花盛見いるゝてゝ心かゝて来

寛喜元年女院入内屏風に

入道前太政大臣

つゝ衣乃代のゆゝしきよりの花のゆゑ風に枝をゝる波

鳥羽院位よりもしくゝる時四条にて花を見てよ

足伯宿禰

面影入道前関白太政大臣

みさびありてのゝしき風の宿きゝ九重ゝ花のゆゑ

應德元年三月中殿花契多春と事を題

せる歌乃よ

大納言仮明

ゝ衣代乃ゝ云にゝ祈乃花なる重ゝ八さた拾くすゝ此ゝ花さかりゆき

永長元年三月当ゝ花契乃年とゝ屏

前中納言匡房

天暦七年十月右宮乃四方より義方を使はしてよ
ひとつのことをもうつしまつりたまへとて

天暦四年

四月十三日庚申夜女蔵人御前より義孝を使
まつり給はんとて達部まうつり給へ
侍ひて候給へるに義孝をかけてくらべ侍る

大納言重光

延喜十七年十月菊の宴の日四位五位参
仕うらう
三條右大臣 干時左衛門督

兼保三年大井河より行幸日月あり重光
雑乳母

影しう次
女人ども

参議輔親

まつの鶴とて元はいきなる樹なれども山ちかきゆへにとくに
城川院は百首うたあてまつりし時被言

権大納言公實

元の代のかとゆかしくはなれども濱のさはこゆる
月次の屏風の繪をゆるよりよめる

元輔

千とせをまつとはいとゝ裁てこゝろ人そうたてまつる

右近大將宣旨軍賀の屏風よ

素性法師

裁てみる松しかとは元の代よりもゆきとうたしし
延喜御時女一宮のもきさいの紫宋てしてつ
よりて意よかりしさ奇ゆえれりふよてさて
まつりし

躬恒

さゝとはをしらてはしりぬ元の代やあん
奥元二年初秋宮侍従厨ゆてりふ度申奏人
まつりてゆをひりつゆてゆよ仏をしる

順

昔ゆをしかもゆ河竹の代をは元てか世人をしらん
兼保三年十月大井河よ行幸の日序をてまつり

大井川つ[illegible]ことにみ[illegible]

右御門右大臣

建仁二年鳥羽殿にて池上松風といへる事をよめる

源具親

謙ちく[illegible]

忘すゑ人のとゝかゝる松風よもせをうつして座の池水

秋乃ゆう

鎌倉右大臣

千早振[illegible]つを山乃玉椿やをとゝろ代を色はうつし

影不知

藤原為頼朝臣

水乃上を[illegible]

寄月秋といへるを

四方乃海風をゝ[illegible]

源宰相中將

月多秋友といへる影を謙ちく[illegible]

九月十三夜十首の合よ右兩月

右衛門督通成

いく秋もかはらぬ秋の月よ[illegible]

後鄭成家

神をみよ[illegible]

建仁三年和歌所にて輝阿よ九十賀をまとゝ

[illegible]

久ふ

百年のちろく坂よりはるかに来たりて今ゆくすえ

かの杖とりて法よ蒼しゐけり　大蔵卿有家

出の杖行ふ山あり沢我元はやと万代のさかえあり

天仁元年大嘗会悠紀の四屏風よ三神山　皇太后宮大夫俊成

御垣みつ見れば山ぞ春霞千年のうち見なれぬる

かつ見山

くもりなき光の代よい鏡山ちとせの月の新みゆ

前中納言定房

仁治三年悠紀風俗の三神山　前参議為長

いかりよ若とのまきてそめりなりとれば山いとれそこの山

おのれ是基の風俗の奇石清

前中納言経光

すえ長き千代のひとそひとまれまと二葉なり石清の松

寛元四年主基風俗三神山

正三位成資

非山の日ひのうかかすてふとよれわうれやえそくるまさ

おれ四屏風よ藤坂山

世乃春さの山りはく花乃千代のうゑ

春の立ち加ゑ

斯集者以大中弁源高明卿為御使
下賜之弥可嗜山道之由被　仰下間
畏兼之皆申入畢

文中二年　月日　沙門